

柔軟心

第一講 善巧摂化

- 一、善巧摂化……………二一五
- 二、明自利満足……………二二〇
- 三、利他方便……………二三三

第二講 障菩提門

- 一、障菩提門……………二五六
- 二、智慧門……………二五七
- 三、慈悲門……………二六一
- 四、方便門……………二六四

第三講 順菩提門

- 一、順菩提門……………二六九
- 二、無染清浄心……………二七〇
- 三、安清浄心……………二七三
- 四、樂清浄心……………二七五

この「柔軟心」という講題は、昭和十二年十二月一日より七箇日が間、本部例年の報恩講聖会に於いて講じたものである。余が楚々たる生涯に於いて、計らずも値うたる願生道に於ける、一大七宝の記念塔の一つであった。当時講を進めつつ、講筵にあるべくして無き多くの同胞の顔、恵まれて聞き得たる奇しくも尊く輝く眼前の同胞の姿、色々な想念が遂に余をしてペンをとらしめたのである。希くば同胞よ、今読んで解せざる人も、これを一冊も失うことなく座右におき講を終わるまで蓄えて熟読翫味して、如来本願力の尊高、如来浄土の国徳、大心海の深広無涯底を体解するの一助ともせられんことを。(十二、二一、四)

第一講 善巧摂化

一、善巧摂化

まず、御本典証卷十五右か、論註下二十七右か、聖典(明治書院島地編)一二ノ一二九を開くべし。「善巧摂化とは、(論に)『是の如きの菩薩は、奢摩他毘婆舍那、広略修行して、柔軟心を成就す』とのたまえり」

以下講ずる所は、もと論註下に出づる、善巧摂化章の文である。聖人はこれを、証卷の還相篇に引用せられた。即ち、浄土に往相して、自利成就する菩薩は浄土に生じおわってやがて、利他教化地に到って大慈悲をおこし、一切衆生を還相摂化するのである。されば、この証卷、還相回向篇の最初には、

『浄土論に曰く、『出第五門』とは、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察し、応化の身を示して生死の蘭煩惱の林の中に廻入し、神通に遊戯して教化地に至る、本願力の回向を以ての故に、是を『出第五門』と名く』
と出された。如来本願力の回向によつて、浄土の菩薩は、弥陀同体の証を成就して後、生死煩惱の蘭林に廻入して、遊戯三昧に生きる。これより講ぜんとする善巧摂化章已下も、この還相の菩薩の第五回向門の真相を語るものである。我等は、はるかにこの還相菩薩の普賢の徳を憶念して、往相の生活をして、淳一相続せしめんとするのである。

「善巧摂化」とは、まず、自利を全うするの利他の謂である。けだし、この「自利と利他」とは、一体の心の両面にして、自利あれば必ず利他あり、利他あれば必ず自利あり、時に自利のみを言うとも、自利利他の自利であり、時に利他のみを論ずるも、自利利他の利他である。自利利他、二利の中間に如何なる力を以てこれを割かんとするも、遂に、自利と利他とを分割することは不可能である。あたかも、自損損他、自害害彼が、遂に無明煩惱の両面に過ぎざるが如きと同一である。重ねていう、自利利他は、一如不二、一体にして、分かつべからず、しかも同ずべからず。之れ誠に盡末来際を徹しての真理、巖として動ぜざる法則なりとす。

かるが故に、久遠の本仏已に、自ら法蔵因位に下り、無量寿、無量光の報身を自利満足し、その自利成就によつて、一切群生を利他成就せんとし給う。若不生者の利他成就なくして、自利正覚の成就はなきが故に「設我得仏(自利)十方衆生(利他)……若不生者(利他)不取正覚(自利)」と誓い給う。本仏既に、自利によつて利他を起し、利他によつて自利を成就したまう。況んや、法界に仏事を化作し、還相摂化の一大事因縁を展開せんとする菩薩をや。自利成就せずして、利他あるべからず、利他なくして、自利あるべからず。「善巧摂化」とは、善巧とは自利を全うするの利他、即ち自利利他の利他をいうのである。摂化とは、一切衆生を教化すること、摂化することである。即ち、言いかえれば、実智(自利の智)に即する権智(方便智)を以て、能く衆生を化するを善巧摂化というのである。

この善巧摂化の言は天親論主の浄土論に於いては、「巧方便回向成就」と云われるものである。同一の世界を巧方便回向と云い、善巧摂化と云われるのは、浄土の菩薩は、衆生に方便回向することを以て、善巧に衆生を摂化するが故である。

憶うに、人間衷心の願いは、人を苦しめ、人を泣かshめて、自ら楽しみ、自ら笑い得ると考えるものは無いのである。しかるに、凡夫は、何時しかに、顛倒の妄念によつて、迷い深きものとなり、自ら貪瞋の波浪に吞まれ、現前の煩惱に動かされて、自損損他の闇路にあるものである。自損して自ら知らず、損他して猶ますます識らず、貪欲もの言いて、他の苦悩を苦悩とせず、他の喜びを喜びとせぬものである。されば、自利を全うするの利他たるこの善巧の二文字は、凡夫の世界より去るものである。かくて凡夫自力の世界は、自ら救わず、他を救わざる世界なるが故に、安住なきものなるのである。

先に論には「巧方便回向」と説かれ、鸞師は、「善巧撰化」と云われると言ったが、止観四之一には「方便名善巧」（方便を善巧と名く）と云われる。これによれば、方便と善巧とは同一の意義である。註維摩一には、

「方便大要有三。一善於自行而不取相。二不取証。三善化衆生。具此三已則能成就衆。」

（方便に大要三有り。一には自行を善くして相を取らず。二には証を取らず。三には善く衆生を化す。この三を具し已れば則ち衆生を成就す。）

と云われる。その第一は自利の真実なることを明し、その第二は利他の大悲を明かすものである。即ち菩薩は慈悲なるが故に、涅槃におつて涅槃に住せざるを、証を取らずと云われたのである。第三こそは、自利利他一如の境に於いて、衆生を化す方便を示されたものである。この三種は、三即一である。

以上の如く考うる時、善巧撰化とは、誠に人と人との正しい生活を示されたるものともとることが出来る。されば仏教に於いては、宗の如何を問わず、「回向の心」を教うるものである。死人あれば、仏事を営んで追善供養を成し、これをあの世の人に回向せんとするが如き、（ある日の新聞にありし一将校の談。某地に於いて戦の後、支那の苦力、敵の死骸を片づけつつあり、これを日本兵士手伝う。後、苦力たち、雪を取り来たつて兵士にすすむるも、言通ぜず、将校これを聞けば、死人を扱い、手に悪気あればこれを洗えというにあり。苦力の眼には涙が光っている。兵士たちは、死骸を埋めし土の上に、煙草に火をつけて、一本づつさしている。おそらく、焼香のかわりならんと、これ自然にあらわれたる、人と人との回向の心なり。）人の心には、確かに³一切衆生の上に、己が善と信ずるものを回向せんとする心がある。かるが故に、仏教に於いて説かれる廻の回向八万四千と云われる。しかるにかかる無数の善巧、方便回向の中、其の最も、善巧にして善巧なるは具体的には何であろうか。

浄土論にはこれを

「一切衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜん」と作願す。是れを菩薩の巧方便回向成就と名く。」

と説かれる。還相の菩薩といえども、具体的には、撰取衆生同生安樂より外に道はないのである。自ら念仏して浄土に願生し、それを通して、衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむることこそ、如実の巧方便回向成就である。このことは後に至つて詳説せられる。

余は「柔軟心」の題下に、善巧撰化章、障菩提門章、順菩提門章の三章を講述せんとするものであるが、この善巧撰化章は、自利によつて利他を起すを云い、次の二章は、利他を全うじて自利を成ずることを明かす。したがつて章目を立つるに、この章は、所起に約して、利他を以て「善巧撰化」と名け、次の二つは、その所成に約して、自利を以て名とするのである。然れども其の実は、彼此互に相即し、共に相具するのである。

二、明自利満足

(二) 如是菩薩。

「如是菩薩奢摩他毘婆舍那広略修行成就柔軟心」

ここに菩薩とあるは、発菩提心の人を総じて菩薩と名けられたものであつて、凡聖共に通じるのである。十住論一に云く、

「有但発心亦名菩薩何以故、若離初発心則不成無上道猶如比丘雖未得道亦名道人」

初発心の人は、菩薩ではない。しかし初発心の人を外にして別に菩薩は生まれない。それ故に、発心せる人も亦、菩薩と名けられるのであるとの説である。下に、大經の三輩の文を引いて釈せられるも亦この意である。この菩薩の言が、時には善男女(起觀生信章。当修の機に約していうなり)と云われ、この章には、菩薩(已修の機に約して)と云いて、二利成就せることを顯すのである。

善巧撰化章已下に於いては、この「菩薩」が主題となつている。この「菩薩」について、先輩諸哲は、凡そ三説を出している。

一、願生行者を指す。

論の文の表面より見れば、この菩薩は、明らかに正しく願生の行者の修行成就の因果を示されたものである。

一、法蔵菩薩を指す。

これ宗祖聖人が、二門偈に於て示されたもので、論の文に表れたる菩薩の五念門、即ち修道の因果は、そのまま法蔵菩薩の発心修行を説かれたるものとされたが故である。即ち法蔵菩薩は、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五念門によつて、自利利他一如の正覺を成就せられたのであるとするのである。

一、還相の菩薩を指す。

これは、此処に(証卷)還相回向を説かれる下に、この文を引用せられたが故である。

以上の如き、同一の菩薩の文字の上に三義を見ることを如何に融會すべきであらうか。

以上に於いて述ぶるが如く、同一の菩薩なる文字が、ある時は、願生の行者ととられ、ある時は、還相の菩薩と説かれ、ある時は、法蔵菩薩と解せられることは、何故であるか。これ畢竟同一の文が、異なる意味を以て、各処に用いられたが為に他ならない。

第一に願生の行者と言う所以は、浄土論の文の当面は、徹頭徹尾、願生の行者たる天親菩薩が一心に如来に帰命しつつ、次第に、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向と、一心五念の相を展開しつつ、自利利他成就する相を願生の歌として説かれたものであつた。されば菩薩とは、願生の行者である。

次に、還相の菩薩とせられることは、宗祖が、それを教行信証の証卷において還相回向篇に、この文を引用せられたが為である。

憶うに、往還二相は、一は入門であり、一は出門であり、一は自利成就せんとするものであり、一は利他成就せんとするものであつて、往還もとより一に非ずといふべきではある。

しかるに、還相の菩薩といえども、それは、唯単に、理想界に架空せられたる人ではなくて、我等の現実界に來たつて、一切衆生を導きつつ、衆生と共に安樂の國に願生する人である。されば、還相の菩薩といえども、具体的には願生の行者として、一心帰命、普共諸衆生、願生安樂國と、願生の一道を歩むより外にはないであろう。

宗祖聖人は、還相摂化の方便を大聖はもちろん、七祖の上に、王舎城の諸縁の上に拝された。自らを引導して念仏の法門に入らしむる順逆二縁全ての上に、浄土より生死海への還相摂化の方便相を味われた。されば、往相位に立つて念仏する者が、我が前に立つて我を導く現実の教主善知識の上に、還相の意味を拝むのである。我等が、往相回向の生活にありつつ、還相の徳を説ける教の意味を領解することが出来るのは、我にせまる教主聖人の上に、還相の徳を拝むことが出来るが故である。されば論註の文は、これらの人の内的生活を開顯せられたものともとることが出来るのである。されば、同一の文が、往相の行者ともとられ、還相の菩薩とも解せられる内面的交渉を知ることが出来るのである。

しかるに眼を一転して、菩薩の利他大悲の根本を求むれば、そこに法蔵菩薩を発見するのである。止観相順(後に説かれる)して五念門の行を修し、広大なる三嚴二十九種の浄土を建立するものは法蔵菩薩である。この大慈悲によりて成就せられたる眞実報土より衆生救済の実現せられるもの即ち回向である。還相の菩薩といえども、この大悲の本願より生起するものである。法蔵菩薩の因果なくしては、往還二回向の菩薩の全てはあり得ないのである。この意よりすれば、全文ごとごとく法蔵菩薩の発心修行の因果を説けるものととられるのである。

されど、証卷還相回向に於いては、正しく還相の菩薩が、広略相入の浄土界中より、大悲心を以て、この生死界に還來して、衆生を利他教化する有様を示されたものである。即ち(一)止観相順、広略相入は、菩薩の自内証を示し、(二)大悲回向は、その証より自然に発動する利他教化の願を示し、(三)巧方便回向は、正しく衆生済度の相を示すものである。しかして、かかる巧方便回向は、上の第一第二の裏書をまつて初めて具体的にその意義を発揮するのである。

(二) 柔軟心の成就

「如是菩薩奢摩他・毘婆舍那広略修行成就柔軟心」

この天親論主の語を釈して、曇鸞は、
「柔軟心者謂広略止観相順修行成不二心也。譬如以水取影、清静相資而成就也。」
と云われる。

以上の文の意は、自利利他の利他、即ち還相の菩薩の善巧摂化は如何にして可能であるかを説かんとして、まず柔軟心の成就を示されるのである。

柔軟心とは、強梁又は強剛ならざる心である。さりとてまた、柔弱又は懦弱ならぬ心である。前者は固くして弱き我慢の心であり、後者は弱くして力なき心である。柔軟心とは、強くして柔らかなる心である。これを大經に見るに、彼の浄土の菩薩を説くに当たつて「身心柔軟無所味著乃至清浄安穩微妙快樂等」と示し、如来本願中、第三十三願、觸光柔軟願には、

「設い我仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が光明を蒙りて其の身に触れん者、身心柔軟にして人天に超過せん。もし爾らば正覺を取らじ。」
と誓われ、第十二願成就の文には、

「其れ衆生有りて、斯の光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず焉」

と説かれる。これによつて之を思うに、柔軟心は、現当二世、往還二相に通ずる巨益である。

しかるに今、善巧摂化を説くに当たつて、論主は

「善巧摂化とは、是の如きの菩薩、奢摩他、毘婆舍那、広略修行して、柔軟心を成就したまえり」と説き、鸞師は釈して

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して、不二心を成ぜるなり。譬えば水を以て、影を取るに、清と静と相資けて成就するが如し。」

という。まず、「広略止観相順修行成不二心」とは、広略とは浄土の広略相入を謂う。浄土の広略とは、三種莊嚴二十九種をさし、略略とは、一法句、一法句とは清浄句、清浄句とは、眞実智慧、無為法身のこと。この眞実智慧無為法身によつて、浄土の広大なる莊嚴を生じ、広大なる莊嚴によつて、清浄功德を出すのである。略略によつて広相あり、広相によつて略略に入る。これを広略相入というのである。されば浄土は広略相入の境である。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ぜるなり。」

次に止観とは、止(奢摩他の訳)とは定であり、観(毘婆舍那の訳)とは止定によつておこる観慧である。即ち心を一境に止むるは止であり、それによつて浄土の広略相入を觀ずるは觀である。されば、浄土の広略相入を觀ずるものは、觀である。しかし觀を成就するものは、心の波をとどむる止である。故に止観相依つて、浄土の広略相入を知るのである。

かくの如く、止観互いに相資け相順して、広略相入する心を不二心というのである。止観は誠に不二心である。されば不二心は、広略相入し、止観相順して境智不二、能所融合泯亡する心であり、これを柔軟心というのである。さればもし広に執して略を失い、略に偏して広を知らずば不二心ではない。止観も亦然り、定慧相資けて彼の広略の如く、如実に知見し、柔軟に調和するを柔軟心というのである。止観不二心は、誠に法の実相に契う心である。されば浄土は広略不二の境であり、止観は広略相入する心なるが故に、止観は浄土の心である。したがつて柔軟心は浄土の心である。柔軟心は、浄土の眞実相を止観の行によつて觀察することによつて成就するのである。浄土の広略相入なくして如実の觀はないし、觀なくしては、止も成就しない。止が成就しなければ觀なく、觀なければ広略相入を知らない。かく順逆いづれよりも、止観不二の心によつて柔軟心を成就するということは、浄土の広略相入の徳こそ、止観を成就し柔軟心を生ずることが出来るのである。されば論の文には「如実知広略諸法」と云い、鸞師は註釈して、

「実相の如くして知るなり。広中の二十九句と、略中の一句と、実相に非ざることなきなり。」と説かれる。浄土の広相二十九種も、略相一句も、実相に非ざることなきが故に、その実相の如く知って浄土に違逆せざる心即ち柔軟心である。

実相とは「相即ち無相」なるを名けて実相という。広略相入に達すれば、即ち実相の如く知ると云われる。三種莊嚴の実相は、法性であつて、相好莊嚴即ち法身であるが故に、広も単広に非ず、略も亦単略に非ず、故に「莫^レ非^ニル^{コト}実相^一」という。しかし実相という限り、広より略に入り、相より無相に達するにあり、これは特に般若実相の智に約していうのである。浄土の莊嚴二十九相に入つて、いよいよ無相を知る、これ実相の如く知るのである。そこに柔軟心が成就する。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ぜるなり。」

前に於て、浄土の菩薩が、柔軟心を成就するに當つて、「広略の止観相順して」修行し不二心を得ることを説いた。しかしながら初学者の便宜を思い、広略相入等の言について、わかり易く重ねて説くであろう。

広略相入とは、浄土には、二種の相がある。二種の相とは、広相と略相とである。広相とは、浄土の莊嚴仏土功德成就十七種と、莊嚴仏功德成就八種と、莊嚴菩薩功德成就四種と、この三種莊嚴二十九種を広相というのである。天親論主は、浄入願心章において「この三種莊嚴は、願心をもて莊嚴したまへり、応に知るべし。」と説かれ、鸞師は註解して、

「応に知るべしとは、この三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清淨願心の莊嚴せる所なるに由りて因淨なるが故に果淨なり、因無くして他の因有るには非ずと知る応しとなり」と言われた。この註家の意によつて論主の意をうかがえば、浄土の広大なる莊嚴は、但単に美しき世界ではなくて、特に願心莊嚴の世界であることを示されたのである。願心莊嚴の世界とは、浄土の三嚴は本法藏菩薩の四十八願等の清淨願心の莊嚴せられたる世界であるとの意である。即ち弥陀の浄土は「報土」たることを示されたのである。願心莊嚴の世界とは、報土である。憶うに、凡夫は生死海をその生活対象とし、二乗は灰身滅智の實際を証して、何等の活動を持たず、自力の行者は、化土に入り、しかして菩薩の生活は、報土をその生活対象とする。報土に化生することは、菩薩の無限の光榮である。報土は清淨願心の莊嚴せる世界である。しかして、願心即ち四十八願は、一一誓願為衆生故としてその全てが衆生において必然の交渉を持つ、若し不生者不取正覚の願の具体化された世界である。衆生を救わずばおかぬとの大悲方便、利他成就より外に何等の意味なき世界が報土である。願は衆生の苦惱なくしては生まれないのである。しかるに願心莊嚴の世界、即ち報土は、「因淨なるが故に果淨なり。」清淨なる因果、即ち本願のままに成就せられたる如来正覚の依報である処の世界である。「因無くして他の因の有るには非ずと知る応し。」願心莊嚴の世界にして、無因でもなく他因でもない。唯一願心に酬いて顕現する世界である。これ「清淨願心の莊嚴せる所」と言われる所以である。

しかるに以上の如く浄土を願心莊嚴の世界と領解することによつて「願心莊嚴」の意味はわかつたが、「清淨願心の莊嚴」とある、清淨の意は、何を示すのであろうか。「因淨なるが故に果淨なり」とある、淨とは何故であらうか。論及び註に曰く

「(論に)略して入一法句を説くが故に、とのたまえり。上の国土の莊嚴十七句と、如来の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを「広」と為す。入一法句は「略」となす。何が故ぞ広略相入を示現すとならば、諸仏菩薩に二種の法身有り、一には法性法身、二には方便法身なり、法性法身に由りて方便法身をせず、方便法身に由りて法性法身を出す、この二法身は、異にして分つ可からず、一にして同ずべからず。是の故に広略相入して、統ぬるに法の名を以てす。菩薩もし広略相入を知らずんば、則ち自利利他すること能わず、(論に)『一法句とは、謂く清浄句なり、清浄句は、眞実智慧、無為法身なるが故に』とのたまえり。」

以上の説は、浄土がいわゆる「広略相入の世界」たることを示されたものである。

まず一法句とは、何であるかということについて、六要には「一法の二字にしよせん」の法体、句の一時は能詮の名字なり」とする。しかるにこの一法句の釈について古来甚だ多くの説がある。これを、眞如の理とするもの、眞如を照らす般若の智とするもの、或は、名号又は覺体の事とするもの等と別れるようである。安芸の慧雲師は、一法句を以て「一法句は不二法門の謂なり、理事不二、悲智不二なり。」と云い、不二の故に一である、法門の門は句の義であるとし、この旨に達すれば、一法句を理とするも亦得たり、事となすも亦得たりと言つてゐる。この説を最も勝れたりとすべきであると思う。慧雲師の言の如く、あくまで理事不二、悲智不二の上に立つて、玄一の小経疏の説の如く、「眞如一理の句なるが故に一法句という」というも亦可とすべきであらう。已下、眞如の理を一法句となすとしておく。

浄土の三嚴二十九種は、いわゆる広相の浄土である。この三種莊嚴の広相は、この一法句の略相に入るのである。これを入一法句と云われるのである。一法を開けば無量の莊嚴となるを広と名け、諸相を摂して一法に入るを略とするのである。広は徳の相であり、略は徳の体である。これを広略相入というのである。

これを更に詳説せんとして鸞師は、「諸仏菩薩に二種の法身有り、一には法性法身、二には方便法身なり、法性法身に由りて方便法身をせず、方便法身によりて法性法身を出す、この二の法身は異にして分つべからず、一にして同ずべからず、是の故に統ぬるに法の名を以てす。菩薩もし広略相入を知らずんば、則ち自利利他すること能わず」と示される。法性法身は略、方便法身は広である。法性法身に由りて方便法身を生じ、方便法身の徳相によつて、法性法身の体徳を顕現するのである。法性法身とは、法性とは眞如の理、法身とは智、法性を証するの法身を法性法身という。又、能詮しよせんは境智不二であるから法性即ち法身とも云える。方便法身とは、自利を全うする利他を方便と云い、形を現し名を示して能く衆生を摂取するをいうのである。

この二身は、二にして一、一にして二である。般若の絶対智によつて得るものが法身であり、この法身によつて大悲方便をおこすのが方便法身である。大悲方便を全うすることなき法身はあり得ないし、法身なくしては方便法身も出ては来ない。方便法身の世界は、三種莊嚴の広相であり、法性法身は、形色を超えたる無相である。しかして略相たる法性法身の徳は、広相たる方便法身の上に具現され、広相は顕現すればするだけ、略相に融入摂入するのである。これを広略相入というのである。されば

「菩薩もし広略相入を知らずんば、則ち自利利他する能わず」の言も知らるるのである。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ずるなり。」かく浄土の広略相入の徳を止観不二心によつて得るもの即ち、菩薩の柔軟心である。されば柔軟心こそは、浄土の広略相入の徳によつてのみ得る所の心である。柔軟心は智慧である。広略の諸法を照見する般若の智慧である。これなくして自利利他することは不可能である。

「譬如以水取影清静相資成就」

広略の止観相順して不二心を成ずる相を譬によつて表現せられるのである。水とは、能縁の心に喩え、取影とは、境の現ずるに喩え、清とは清澄で観に喩え、静とは、寂静で止の波乱の動くことなきに喩えられたものである。水よく清澄にして、寂静なれば、影は自らその中に現ずるが如く、清澄なる観と、寂静なる止と相資することによつて、観心明かなれば、浄土の広略の境相が自ら現ずるであろう。清水ももし動けば、影は現れず、濁水は静なるも影を取るに術なき如く、定を得るも観慧なくば定も意味をなさず、観慧を得んとするも、諸惑心を乱して能く智慧を障^さえるならば、境を現ずることは不可能である。止観相順することは、清浄相資けるが如しである。されば「水を以て影を取るに清と静と相資けて成就するが如し」というのである。かくして柔軟心において境と智と冥合して不二心を成就し、観心の水を以て所観の境を取るに、止観の清静相資けて、所観の境現前し、不二心を成ずるを、相資成就というのである。柔軟心の成就をおわる。

三、利他方便

一、巧方便回向

浄土論には

「如是成就巧方便回向」

と示される。已に、善巧摂化が、浄土の広略の徳を止観相順修行することによつて、柔軟心を成就することによつて得られることを説かれた。今それを受けて「如是」と云い、成就巧方便回向と示されたのである。論註にはこれを釈して

「如是者、如前後広略皆実相也」と云われる。

如是とは、前の如実知を標すのである。成就とは、正しく後の巧方便を標すのである。前後広略とは、前とは観行体相章に示されたる二十九種莊嚴の広説のこと、後とは、次の浄入願心章に示されたる一法句の略説、広略二説も、皆是れ実相である。この広略二相皆実相なるを「是」と云い、真実智慧がこの境に契うを「如」と謂うのである。「如是者、如前後広略皆実相」の意、了解せられたことと思う。

前において、浄土の略相を一法句と云われることについて説いておいたが、浄入願心章には「一法句とは謂く清浄句、清浄句とは謂く、真実智慧・無為法身なるが故に」

と説かれてある。如来浄土の略相とは実に、眞実智慧、無為法身である。眞実智慧こそは、無為法身、即ち眞相を照らす光である。その眞実智慧こそは、やがて盡十方無碍光の体であり、無為法身こそは、無量寿の体である。この光寿二無量こそ、一切莊嚴の根本をなすもの、如来の大功德である。この智慧こそ平等一如の眞相を知る眞実智慧である。二十九種の広相といえども、悉くこの、眞実智慧、無為法身より顕れたるものなるが故に、広略皆眞相と云われるのである。

しかるに鸞師は継いで

「以知実相故則知三界衆生虚妄相也。知衆生虚妄則生眞実慈悲也」

と出された。太陽に向かつて開かれたる眼は、万象に向かつて開かれたる眼であるが如く、浄土の眞相に向かつて開かれたる智慧は、やがて、三界衆生の差別相に向かつて開かれたる眼でなくてはならない。衆生は虚妄の相に苦悩するものである。その衆生の虚妄を知れば即ち、眞実の慈悲を生ずると説かれるのである。先に述べたが如く、柔軟心こそは、浄土の眞相を知る心である。浄土の眞相の徳によつて成就する心である。しかし、そもそも柔軟心が問題にされたのは、善巧摂化の問題においてである。巧方便回向を成就せんとすれば、まず柔軟心を成就しなければならぬ。しかして柔軟心は、如実に浄土の広略相入を知る智慧、即ち眞相の智慧によつて成就せられるのであるから、論には、

「如実に広略の諸法を知り、是の如く巧方便回向を成就す。」

と説かれるのである。如実に広略の諸法を知ること、即ち柔軟心を成就することとなるが故に、柔軟心こそは、巧方便回向の心である。即ち「眞相を知るを以ての故に即ち三界衆生の虚妄の相を知る。衆生の虚妄を知れば、即ち眞実の慈悲を生ずるなり。」眞実の智慧は慈悲となる。柔軟心は浄土を縁するよりおこる心ではあつても、柔軟心と云われる限り、現実生死界にはたらく菩薩の心である。であるが故に柔軟心こそは巧方便回向の心である。

誠に、眞相を知るの智(後に名義撰对章に於いて説かれる、鸞師の智慧の釈には、この眞相を知る智慧を般若とし、「般若とは如に達するの慧の名なり、方便とは、権に通ずるの智の称なり。如に達すれば則ち心行寂滅なり。権に通ずれば備に衆機を省る。」と説けるもの即ちこれである。)は復三界衆生の之に背くのである。ここにおいて、方便省機、即ち下化衆生の心を生ずるのである。衆生の虚妄を知るが故に即ち大慈悲を生ずるのである。ここに眞実の慈悲とは、無縁の大悲をいうのである。

衆生の虚妄を知れば、大慈悲を生ずるのは、菩薩の心が柔軟心なるが為である。蓋し浄土より還相せる柔軟心の菩薩ならざれば、衆生の虚妄に対して大慈悲を起すことは出来ないであろう。即ち衆生は衆生の虚妄に対しては、大慈悲を起し得ないで、瞋恚、憎悪の心を生ずるものである。浄土の眞相を背景として、眞実智慧を成就せる、還相柔軟心の人のみ、衆生の虚妄に対して、唯大慈悲を起すのである。かく衆生の違逆虚妄に対して、瞋憎を超えて大慈悲を起し得るのは、菩薩が浄土の眞相を念ずるが故である。されば続いて、

「知眞実法身則起眞実帰依也。」

と説かれる所以である。

実相は真実の法身である。即ち法に約すれば実相と云い、人に約すれば法身という。されば実相を知るとは、真実の法身を知ることである。実相法身を知るが故に究竟の帰依を起すのである。これ即ち上求菩提心である。如来法身に帰依することは、限りなく智慧によつて、自利満足せんとするのである。即ち願作仏心である。

慈悲はこれ利他度衆生心、帰依は自利の願作仏心、この帰依と慈悲とこそ自利を全うじて利他を成ずる処の巧方便である。是れ則ち、巧方便回向を成就するのである。

菩薩は生死界に現行しつつも、常に彼岸に超越し、しかも衆生の虚妄に対しては随順して大慈悲を起すのである。しかしてこの帰依と慈悲とは柔軟心の二相である。即ち柔軟心の超越性は帰依によつて生まれ、柔軟心の随順性は慈悲によつて生まれる。この帰依と慈悲とを全うじて不離なる菩薩の柔軟心の具体的大用を巧方便というのである。

憶うに、衆生に対する善巧摂化を説かんとせられるに当たつて、まず柔軟心の成就を問題とせられた所以も、ここに於いて明かとなるのである。自利成就せずして、どうして利他成就があろう。自利によつて利他を成就し、利他を全うじて自利は完成する。自利利他一如の世界なるが故に、まず菩薩は、浄土の実相法身に帰依して、自利成就して、柔軟心をおこし、備に衆生の虚妄相を知ることによつて、大慈悲をおこし利他方便の世界に出でんとするのである。

もし菩薩が智慧による真実の自利成就なくして、衆生の為にするならば、それは凡夫の顛倒に墮し、もし法性を証すといえども、利他大悲の動を持たぬならば、二乗と云われる。ここに於いて、菩薩の世界は「如是成就巧方便回向」と言われるのである。如是成就とは、帰依と慈悲とによる願作仏心と度衆生心、即ち巧方便回向の心である。

二、巧方便回向成就

(1) 巧方便回向成就の三願

論に云く

「何者菩薩巧方便回向。菩薩巧方便回向者謂説礼拝等五種修行所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願攝取一切衆生共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便回向成就」

以上の論の文によれば、菩薩は礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五念門の行を修する。しかして其の五念門に集る一切功德善根に於て、三つの願あることを示される。即ち、(一) 自身住持の樂を求めず、(二) 一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、(三) 作願して一切衆生を摂化して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ、と云われるのがそれである。これは後に至つて、障菩提門に於いて、智慧門、慈悲門、方便門に配されるものであつて、仏道を成就して、本仏の願意を顕現せんとする菩薩の具体的な生活の意義である。

菩薩は、五念行を如実に修行することによつて、真如一実の功德宝海を獲得する。しかし、その得たる福德は、決して「自身住持の樂を求め」る為にはしない。自身の樂の為にしなければ一切衆生の為にするのである。即ち自然に第二の願「一切衆生の

苦を抜かんと欲するが故に」が出て来るのである。ここに於いて菩薩の大慈悲の心が示されたのである。しかしながら具体的には菩薩は五念行を修して、彼岸へ願生するものである。その願生道に於いて「作願して一切衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ。」と、利他を成就せんとするのである。しかして論主は、これを以て菩薩の巧方便回向の成就とせられるのである。

以上三つの願に於いて、(一)(二)は共に、衆生に対する慈悲であり、(三)は菩薩の帰依を示されたものである。帰依と慈悲とは、柔軟心の両面として説かれたものであった。菩薩は帰依によって自利成就し、慈悲によって利他成就すと。自利利他一如の境こそ、柔軟心そのものであった。しかし自利と利他とは、徹頭徹尾相即一体のものであつて、自利を休止して、後利他するのでもなく、利他を廃して自利するのでもない。真実の利他は必ず不断の自利によつて発り、真実の自利は利他によつて完成するのであつた。であるからこの三願に於いても、慈悲には帰依が裏付けられてあり、帰依には慈悲が裏付けられてある。法身への帰依、即ち智慧を成就しないでは、「自身住持の樂を求めず」との意は発し得ないし、自利成就しきらない者が、「一切衆生の苦を抜く」ことは出来ない。それは自ら水に溺れつゝ、人を救わんとする愚に墮するが故である。「作願して……彼の安樂仏国に往生する」ということは、正しく帰依によつて自利成就せんとするのではあるが、しかしその願心には「一切衆生を撰取して共に同じく」という利他の慈悲が孕まれてある。

さればこの三願こそは、帰依と慈悲とをその内容とする柔軟心の現行に外ならない。裏がえして云えば、柔軟心は、この三願を具足することによつて、真実となるのである。故に「是を菩薩の巧方便回向成就と名く。」と云われるのである。誠に巧方便回向とは、已上の文によつて、還相の菩薩の具体的生活内容たることが知られるのである。

(2)無上菩提心

以上の論の文を解釈するに当たつて、鸞師は次の如く説かれる。

「案王舎城所説無量寿經、三輩生中雖行有優劣莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心即是願作仏心。願作仏心即是度衆生心。度衆生心即撰取衆生有仏国土心。是故願生彼安樂淨土者要發無上菩提心。若人不發無上菩提心但聞彼国土受樂無間為樂故願生亦當不得往生也。是故言不求自身住持之樂欲拔一切衆生苦故」

鸞師は巧方便回向を説くに当たつて、まず大經を挙げられた。即ち大經下巻の初には、至心に彼国に願生する衆生の上中下の三輩あることを示し、三輩によつて行に優劣はあれども、三輩ともに、「無上菩提心を發し、一向に専ら無量寿仏を念ずる」ことが示されてある。

鸞師は今、還相の菩薩の巧方便回向成就の問題を説かんとするに當つて、何故に、往相の行者の世界を示し、一切願生の行者が悉く無上菩提心を發すことを示す文を引用せられるのであろうか。これ願生の行者も亦、二利成就することを積成せんとせられるのである。言い換えれば善巧摂化已下は全て、弘願信心の徳義であつて、唯これ建章の「一心」なることを示されるのである。無上菩提心とは、願生の行者の一心に

外ならない。しかして一心をおいては遂に、如何なる徳も菩薩の上には顕現しないのである。

菩提心の言は、日本浄土門に於ける一つの問題であつた。それは吉水が、その著選撰集に於いてこの菩提心を以て、通途の諸行としてこれを廃捨すべきことを主張されたが故である。吉水に対する真面目なる弾劾^{だんがい}は殆どこの問題が中心であつた。しかるに今鸞師は、この菩提心を以て、別途の安心としたまうのである。抑も、この菩提心なる語は、四十八願中、第十九願及び、第三十五願に出ており、その中、前者は仮にして、後者は弘願他力の真実である。しかして三輩章の菩提心の文には、この権仮と真実と両者を共に含むのである。宗祖はこれを並びとられて、化土巻には、三輩の文を以て第十九願成就文とせられ、又、今文を信巻に引用せられ、菩提心を積せられる下に用い、又成就の一念の異名を列挙せられる中に出された。

三輩とは十方衆生の生得の機品である。雖行有優劣とは、その生得の機類による善に優劣の差別あることを示し、莫不皆発とは、莫不は決定の詞、一を示し、皆発は菩提心の平等を示す。故に莫不皆発とは、いわゆる同一念仏無別道故の世界に外ならない。菩提心とは、誠に願生の行者の一心である。

次にこの菩提心を積するに、三心がある。文に云く「(一)此無上菩提心即是願作仏心。(二)願作仏心即是度衆生心。(三)度衆生心即撰取衆生有仏国土心。」この願作仏心、度衆生心、撰取衆生有仏国土心の三心は、三心であるがしかし、第三は度衆生心を積せられたものであつて、聖道が此土の行証を期せしむる利他に揀異して、浄土門別途の利他心を示されたものなるが故に、宗祖がこれを御引用なさる時、唯、願作仏心、度衆生心の二心のみを出されるのも亦その為である。

次に、この二心の見方に二途がある。一には二心共に仏に約すのである。

願作仏心

願作仏心

仏

信心(衆生) 〓

度衆生心

度衆生心

二は、度衆生心を仏に、願作仏心を衆生に配するのである。仏 〓 度衆生心 ↓ 信心 〓 願作仏心 (願生・欲生)

已上の第一説によれば、願作仏心とは『設我得仏……不取正覚』と自利正覚成就せんとする法蔵の作願であり、度衆生心とは、衆生を撰取せんとする大悲である。この如来の願作仏心、度衆生心、そのままが、衆生の機の上に大信心を成就するのである。したがつて願生の行者の信心は、その体徳としてこの二心を具足するのである。もとより行者生得の機は下品の劣機である。巧方便回向を起こすともその行相としておこすのではなく、体徳として、無疑の一心中に自ら其の徳を内具するのである。鸞師は、菩薩の巧方便回向成就、即ち還相の菩薩が、生死海に還り来つて限りなく衆生を度せんとする利他方便回向成就を説くに当つて、大経の往相回向の行者の世界を説かれる三輩章の文を出されて、上中下輩共に、その生得の機から生まれる行には優劣の差があろうとも、無上菩提心をおこして念仏することに於いては平等一味であることを示された。即ち安樂国に願生せんとする者は要^{かなら}ず無上菩提心をおこすとせられた。我等は菩薩の巧方便回向成就を説かんとされるに当つて、却つて願生の行者

の無上菩提心を出されたことに対して深い感銘を持たざるを得ない。何故であるかというに、往相も如来回向であり、還相も亦如来本願回向である限り、そこには、唯一の大悲の本願が動いているのである。同一の如来の願意の表現に外ならないことを知るが故である。

即ち我等は先に、菩薩の柔軟心について、柔軟心の三つの相であるところの帰依と慈悲において、帰依は願作仏心であり、慈悲は度衆生心であり、しかして「衆生を摂取して有仏の国土に生ぜしむる心」は巧方便であることを知った。しかるに今はこの三心を、往相の行者の菩提心の内容として示されたのである。「この無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり。願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち衆生を摂取して有仏の国土に生ぜしむるなり。是故に彼の安樂浄土に生ぜんと願する者は、要ず無上菩提心を発すなり。」と。この註解の文を注意して拝読すれば、純粹なる菩提心は、論の「(一) 自身住持の樂を求めず、(二) 一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に」等の文の意をその内容とすることを示されたものであることを知るのである。菩提心に於いても、巧方便回向成就の世界と同一のものの求められることを示されたのである。

然れば、利他方便回向成就せんとする菩薩と、願生の行者とは全く同一なるものなのであろうか。其の差異はないのであろうか。憶うに還相の菩薩は、利他成就せんとするものであり、往相の行者は自利成就せんとするものであつて、前者は浄土の大涅槃の証によつてやがて光より暗に大悲の手をさしのべんとするのであり、後者は、暗を後に光の国に衆生と共に旅立んとするのである。であるから二者は全く同一ではないと云われるべきである。しかるに何故に此処では同一の願作仏心、度衆生心等の意をその内容として説かれるのであろうか。

しかるに我等は、今、「無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり。願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。」と説かれるのを見る。即是とは、同体異名たることを示されたものである。即ち願作仏心が自利利他の自利であるならば、度衆生心は自利利他の利他である。しかも自利利他の二利は遂に何物を以ても分かつべからざる一心の両面である。故に願作仏心の自利なき度衆生心は真實の度衆生心でないと共に、度衆生心の利他を持たざる願作仏心も真實の願作仏心ではあり得ない。

願生の行者は、自ら助からんとする願作仏心の人であるが故に、その一心の願生心には、度衆生心を内具するのであり、還相の人は巧方便回向成就して利他を完成せんとする人である。その利他度衆生心は、そのまま自らそれを通して、願作仏の心を満足せんとするのである。願作仏心なくして衆生を救うということは、自らは溺れつつ他を救わんとする凡夫顛倒の愚であるし、他を救わんとする意を具せずして自らのみ救われんとするは二乗の利己心である。ここに往還二相の相違を知ることが出来るのである。

次に、我等は、論の巧方便回向成就を説ける文も、其の帰結に於いては、「作願して一切衆生を摂取して共に安樂仏国に生ぜしむ。」

と示され、又、願生の行者の菩提心、ひいては願作仏心、度衆生心積に於いても、

「願作仏心とは即是れ度衆生心、度衆生心とは即ち、衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。」

と結ばれたことについて、深く考えざるを得ないものである。願生の行者はもちろん、有仏の国土即ち彼の弥陀の安樂浄土に往生するより外に白道のないことはもちろんであるが、還相の菩薩の巧方便回向成就の世界も具体的には、一切衆生を攝取して共に彼の安樂仏国に生れんと作願するより外に道のないことを示されたのである。自ら生ずる限り、願作仏心であり、衆生を攝取する限り、度衆生心と云われるのである。ここに於いて、願生の行者といえども、自力煩惱の心を離れて、如来回向の眞実信心即ち菩提心によるが故に、その願作仏心の念々の歩みは、知らずして一切衆生を念仏道に攝取しつつ往相の一道に自利成就せしめられ、還相の菩薩も亦、衆生を攝取して願生の一道を生きるという、往還帰一の世界を知ることが出来るのである。

和讃に云く

「弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ

心行ともにえしむなれ」

又云く

「他力の信をえんひとは

仏恩報ぜんためにとて

如来二種の回向を

十方にひとしくひろむべし」

往還二相の相発は前後ありといえども、如来に於いては、一念のうちに二種を一時に回向したまうことを知るべく、鸞師がここに三輩の文を出された意もうかがえるのである。

我等は、世尊、七祖、聖人等の上に、還相の相を拝するに、それらの諸聖一人として、自らは還相意識を持たず、全く一心の願生の行者として生きられたるその眞意をも亦知ることが出来るのである。自ら還相意識を持つが如きは、その願生道に不純を混ざるものである。一切は一心願生道において光ること知るべきである。

眞実の信心、即ち一心は、無上菩提心である。であるが故に、眞実の願生者には、必ず菩提心を要とする。しかして無上菩提心とは、既に述ぶるが如く、願作仏心即度衆生心、即ち自利利他一如の心であるとは、鸞師の説であり、又我が聖人の一貫せる説である。

鸞師はいう。

「もし人無上菩提心を発さずして、但彼の国土の樂を受くること間無きを聞きて、樂の爲の故に生れんと願ずれば、亦当に往生を得ざるべきなり。是の故に自身住持之樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、と言えり。」と。

しかして住持樂とは、「彼の安樂浄土は阿弥陀如来の本願力の為に住持せられて樂を受くること間無き」をいうのである。

誠に浄土は安樂国という名が示すが如く、大樂の境である。しかるに願生の行者にして、その如来本願力住持の大樂を得んが爲の故に往生を求めらば浄土に生ずることは出来ないと言われる。それはまた何故であろうか。

憶うに浄土の樂を求めて浄土に生れんとするものは、個我の樂を求める者、即ち樂に囚われるものである。樂に囚われるものは、その根本に於いて如来の願意を、即ち

浄土の意を領解せぬ者である。真実の願生者は「自身住持の樂を求めず」、「不求」とは執着せざることを顯すのである。執着心は生死流轉の凡夫の意であつて如来浄土の意ではない。

浄土の大樂は涅槃の徳である。即ち常、樂、我、淨の樂である。凡夫執着心の求むる樂は涅槃の大樂ではなく苦樂の世界の樂であつて、やがて大苦惱と転ずるものである。ここにおいて「もし人無上菩提心を発さずして」と云われるのである。無上菩提心は決して自身住持の樂を求めぬ心ではない。如来の本願を領解しておこる純粹なる大信心であり、願作仏心であり、度衆生心である。即ち、如来の智慧海さながらの心である。

先に我等は、浄土の心とは柔軟心であることを知らしめられた。しかるに今は又、無上菩提心と云われる。ここに於いて、柔軟心とは菩提心であることが明らかとなる。柔軟心とは無上菩提心の本質である。

前に説かれたが如く、柔軟心は、智慧によつて法身に帰依し、慈悲によつて衆生の苦惱に同感し随順する心であつた。しかるに、智慧によつて法身に帰依するとは、願作仏心であり、大悲によつて衆生の業苦に同感し、衆生の全的運命を自ら荷負することとは、度衆生心である。智慧に依るが故に自身住持の樂を求めず、慈悲に依るが故に、一切衆生の苦を抜かんと欲するは、柔軟心である。今、鸞師はかかる浄土の心を無上菩提心の上に見ようとせられるのである。

一切衆生は、仏道を修することによつて、本願力住持の大樂を得ることが出来る。しかるにその大樂を自ら得ようとしなくて、却つてそれによつて一切衆生の苦を抜き一切衆生に樂を与えんと欲するのである。ここに於いて次に、回向ということが問題となる。

(3) 巧方便回向

次に願生道が何故に巧方便回向と云われるのであるか。まず「回向の名義」を釈して次の如く云われる。

「凡釈回向名義、謂以己所集一切功德施与一切衆生共向仏道」

施与とは回向の回であり、向仏道とは、回向の向である。しかしかかる回向は、浄土門に限つたことではなくて、聖浄凡聖所修の名義を釈せられたものである。故に「凡」の文字が用いられているのであり、「共に仏道に向かう」というて「向浄土」と云わざる所以である。

誠に凡夫は、智慧無きが故に、我執によつて、己が所集の一切功德、それよりおこる樂果をばわずかたりとも他に漏れることを好まず、自らに於いてのみ刈り取らんとするものである。しかるに真実の願生者は、仏智によつて無上菩提心を成就せるものであるが故に、己が所集の一切功德よりおこる樂果をば、これを一切衆生に施与して、共に仏道に向わんとするのである。されば回向とは、衆生に隨順する大慈を現されたものである。ここにも、真実の自利成就是、そのまま利他成就にあることを示される。

しかしてここに別途の回向を挙げずして通途の回向を示されるのも、回向の名義は具體的には、念仏道に於いて如実に成就せられることを示されるのである。

次に巧方便とは如何なる意義を示されるのであろうか。云く

「巧方便者、謂菩薩願以己智慧火燒一切衆生煩惱草木。若有一衆生不成仏我不作仏」これ菩薩は、自利を全うじて、利他を成ずることを明かす。「己が智慧の火」は、菩薩が自らの煩惱を断じ、自ら大法を知つて、自利成就する所の智慧である。しかるにこの自利の智慧の火は、そのまま一切衆生の煩惱の草木を焼き尽くさずばおかないとの利他の大悲の火となるのである。

菩薩は、仏道無上誓願成と、自らの大覚を智慧によつて成就せんとし、それ故に、智断の徳を成就せんとするのではあるが、「もし一衆生として成仏せざる有らば、我仏に作らじ」と、無辺の衆生を度せずんば自らの成仏も亦成就せざることを示さるのである。さればこの文の中に菩薩常途の四弘誓願を拜むことが出来るのである。

この巧方便の積は、自利によつて利他を成就し、利他によつて自利を円成せんとする還相の菩薩の願を示すものではあるが、それよりも先に、法蔵菩薩の誓願である。本仏の本願そのものである。「設我得仏十方衆生……若不生者不取正覚」この十八願の誓願がそのまま、菩薩願ずらく己が智慧の火を以て一切衆生の煩惱の草木を焼かん。もし一衆生として成仏せずば我仏に作らじ、と現されているのではないか。されば、この自利利他一如の誓願は、本仏の誓願である。本仏の誓願なるが故に、還相の菩薩の上に現れるのである。還相の菩薩は如来の願として生死界に活きる人である。

我等は念仏して往相位に立ちつつ、この還相の意を聞いて深い内観にさそわれるものである。しかして往相位の無上菩提心を提出して、その上に体徳として二利成就を見んとせられる鸞師の意に限りなき感銘を受けるものである。

因清浄に非ずして如何にして果清浄を得ることが出来よう。行者の無上菩提心と云い、菩薩の柔軟心と云い、共に如来本願の回向表現である。

しかるにここに一つの問題がある。菩薩は自利利他一如の世界にあつて、自利によつて利他を発し利他によつて自利を成就すると云わば一切衆生が業苦にある限り、自利成就して成仏することは出来ない筈である。ここに於いて鸞師はこの問題を提出せられる。

「……菩薩願ずらく、己が智慧の火を以て一切衆生の煩惱の薪を焼かん。もし一衆生として成仏せざる有らば、我作仏せじと。而るに衆生未だ盡く成仏せざるに、菩薩己に自ら成仏せんは」

これ誠に万人の聞かんとする重要な問題である。法蔵菩薩は、五兆の願行に於いて、「十方衆生もし生れずば正覚を取らじ」と誓い、無限の衆生とその内的運命を共にすると宣言しつつ、一切衆生未だ成仏せざるに、無限の生死海をさしおきて十劫に既に成仏したまうと説かれるは何故であるか。このことは、一切菩薩、還相往相の菩薩、全てについて言われることである。而もこの問いに対する鸞師の答えは、明瞭にして簡単である。云く

「譬如火テン欲摘一切草木焼令使盡、草木未盡火テン已盡。以後其身而身先故名巧方便」

今更に鸞師の智慧海に合掌して崇仰の誠を至さざるを得ない。「以後其身而身先故」とわずかに八文字を以て、この困難なる大問題に答えられたのである。其の身を後にする者は一切に先んずるのである。鸞師はこの八文字を領解せしめんが為に、智度論十八の譬を転用して、一つの譬喩を説かれるのである。

「譬えば、火テン一切の草木を摘んで焼いて盡さしめんと欲するに、草木未だ盡きざるに火テン已に盡きんが如し。」

木にて造れる火箸（火テン）を以て草木を焼きつくさんとするに、草木を盡さざる先に火箸そのものが焼きつくされたが如きものであると云われるのである。この譬を法に合すれば、火テンとは菩薩であり、草木とは衆生であり、焼とは利他であり、先盡とは自利である。

真実の利他は、自然に自利を成就することを示されたのである。一切衆生を利他せんとする大慈悲は、一切衆生よりもさきに、まず菩薩そのものを救うのである、一切を焼かんとする火は、他を焼くより先に自らを焼くのである。専ら利他を行わずれば、任運に自利を成ずる。これ全く順菩提門の行なるが故である。この隨順菩提の利他を巧方便と名づくるのである。凡夫は利他を以て損失と考える。利他を以て自損となし、横に利他ならざる自利を得んとするが故に、却つて自損の世界に墮落するのである。真実の利他は決して自損ではない。真実の利他こそ、よく自利を成就する。自利利他の利他のみよく自利を成就する。これを巧方便と名づけられるのである。利¹⁸他にしても自損をまねくならば、決して巧という文字は用いられない。利他が自利を成就すればこそ、利他を巧方便と云われるのである。利他が自利を成就するのは、巧方便よく菩提に順するが故である。身を後にして而も身先んずるを得るのは順菩提の行なるが故である。これ全く菩薩の巧方便回向である。菩薩は自利によつて利他する。而も、自利は唯無限の利他、永遠の利他によつてのみ成就する、この自利利他の利他を巧方便回向といわれるのである。

なお、この以後其身云々の文はその語を老子に採られたものである。老子七章に云く

「聖人後其身而身先、外其身而身存」

次にこの巧方便回向を別途に約して釈す。

「此中言方便者、謂作願撰取一切衆生共同生彼安樂仏国。彼仏国即是畢竟成仏道路無上方便也」

通途に示された成仏道（自利利他一如の無上菩提）は願生道に究竟じられてはじめて如実に成就する。

「共同生彼安樂仏国」これ自身住持の樂を求むるに非ずして、衆生を撰取して仏国に生ぜんが為である。仏国は自利利他一如なる本願によつて莊嚴されたる世界であつて、彼国に生ずれば、彼土は畢竟成仏の道路であり、無上の方便なるが故に、自ら方便の功を勞せずして、任運自然に、菩薩行成就するのである。畢竟とは、広門に約せば果遂の義であり、略門に約せば、決定の義である。彼の仏国は決定成仏の道路であ

る。道路とは能通の義である。即ち浄土に生ずれば、即ち仏果に通ずるが故である。無上方便とは、方便とは、施造及び進趣に当たると。仏法中、成仏の方便は無量なるも、願生道を以て最勝とするが故に、無上方便と云われるのである。

第二講 障菩提門

一、障菩提門

善巧撰化章がすんで、次には、障菩提門と、順菩提門の二章が説かれてある。

前の善巧撰化章に於いては、自利を全うして利他を成じ、利他成ずる処、自然に自利の成就することが説かれてあつた。この自利利他一如の世界こそは柔軟心であつた。柔軟心は、帰依によつて智慧を成就し、慈悲によつて利他を成就する心であつた。であるが故に、この柔軟心は、自然に能く菩提の障碍となるものを離れると共に、菩提門に順じて、仏道を成ずるのである。この離順の両義によつて障菩提門と、順菩提門とが説かれるのである。

この障菩提門の標章は、巻頭の列章には、「離菩提障」となつており、今は障菩提門と云われるのは、何故であるかと云えば、これは、能離に約した名と、所離に約した名との相違である。前は能離に約し、今は所離に約して立名されたものである。智慧、慈悲、方便の三門は、能離の法であるし、我心貪着自身心、無安衆生心、供養恭敬自身心の三心は、是れ所離の障そのものである。このどちらも説かれるのであるから、名目は違つても、其の義は互顯されるのである。本文に移る。

「障菩提門者菩薩如是。善知回向成就、即能遠離三種菩提門相違法」

障菩提門とは、前に説けるが如く、菩薩が巧方便回向(自利によつて利他を成じ、利他によつて自利を成ずる、自利利他一如の世界)を如実に知るならば、三種の菩提門相違の法を遠離することが出来る。この三種の相違の法を離れなければ、柔軟心を成就することは出来ない。柔軟心のない処には、巧方便回向はあり得ない。それ故に巧方便回向の心、即ち菩提心は、菩提門に相違する法を遠離するのである。ここに示された一節は、本章の大意である。依つて次に、三種の菩提門相違の法の遠離が説かれる。

一、智慧門

註の文に云く

「何等三種。一者依智慧門、不求自樂。遠離我心貪着自身故。知進守退曰智、知空無我曰慧、依智故不求自樂。依慧故遠離我心貪着自身。」

これより巧方便回向を開きて、智慧門、慈悲門、方便門とし、この三門に、既に巧方便門中に説かれたる、「(一) 自身住持の樂を求めず、(二) 一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、(三) 作願して一切衆生を撰取して、共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ。」の三句を配当して、この巧方便回向の宗とする処の法に違背する三心を出して、

その菩提門の障りを遠離することを明かされるのである。その第一が智慧門に依る世界である。

「二者依智慧門故不求自樂」

智慧門とは、菩薩の所願所依の法門の名である。「自樂を求めず」とは、能順の心相である。

已に明かされたるが如く、菩薩は、真実の智慧に依つて法身に帰依するものであった。この法身に対する帰依こそは、真実の智慧を生ずるのである。これ柔軟心の自利の一面であつた。この帰依によつて生ずる智慧こそは、菩薩をして、自樂を求めしめないものである。即ち「心自身に貪着するを遠離するが故に」と論には説かれる。これは上に、「自身住持の樂を求めず」と出されたものがこれである。

念仏せざる凡夫は、我心によつて自身に貪着して、自樂を求めることのみに營々たるものである。これ全く真実の智慧を持たざるが故である。智慧門を成ぜざるが故に、菩提の最大の障碍たる我執を破することが出来ず、我執によつて、自樂のみを追求して、却つて自損の闇に沈むのである。

「智慧門によつて、自樂を求めず、我心自身に貪着するを遠離するが故に」これ即ち真実の仏道を成ずる智慧門の相である。

鸞師は更に、これを註解して、次の如く言われる。

「知進守退曰智、知空無我曰慧」

とまず智慧について解釈せられる。即ち、智慧の二字を分つて、**智を以て俗諦を照らす光とし、慧を以て真諦を照らす光とせられた。**下に至つて、「達如之慧、通權之智」20と云われるのがこれである。

智とは「知進守退」ことである。進は進趣、又前進。能く菩提の求むべく、衆生の度すべきを知つて勇猛なるをいうのである。即ち自利利他の一道を精進することに外ならない。守退とは、自受用樂、自らの受用する樂に安住して、退墮するのが退であり、退墮せざるを守というのである。であるから、智とは一歩々々の歩みの上に光る智のことである。かく実践的なものであるが故に俗諦の智と云われるのである。先に「智に依つての故に自樂を求めず」と釈されたのも、智の現行は、自樂を否定することを明にせられたものである。即ち、智の積極的表現が、知進守退であれば、その消極的表現が、不求自樂である。世に二乗と言われるものは、法によつて得るであろうところの自樂に立て籠もつて、進むを忘れ、自ら菩提を求むることを捨て、衆生の度すべきを見ないものことである。智は、自ら進むを知るが故に、自樂を求めて退墮することを守るのである。

しかるに、かかる実践的智の拠つて来るところは何であるか。これが即ち「慧」である。慧を釈して「知空無我曰慧」とある。もと智慧は、法身に帰依することによつて成就するのであつた。柔軟心の一面が帰依であるのはその為である。法身、即ち真如を照らす光は、一切の法の空を知り、無我を知るのである。空とは表詮であり、無我とは遮詮である。即ち一切のものの実我を執する情を遮して無我と云い、その実相を表現して空というのである。**一切の妄想顛倒は、この我を執することによつて生まれる。この人我を否定するものは、真如を体験する慧の光である。**されば、智慧の慧

は、真理に向かつての正しい態度である。真理に対して盲目であつて、どうして、実践的世界が正しかろう。故に菩薩には、必ず真実の帰依がある所以である。

一。菩薩は、智慧門に依つて「不求自樂」自樂を求めざるは「遠離我心貪着自身故」である。

鸞師は、智と慧とを別ち、智を以て「知進守退」ところの実践的なものとせられ、この智によつて「不求自樂」とせられ、慧を以て「知空無我曰慧」とて、真理に向かつての体験的智慧とせられ、この慧によつて「依慧故遠離我心貪着自身」と菩提の障となる心を遠離することを示された。

まことに智慧門こそは、菩提の障をなす所の根本、根本の我が滅して、真実に菩提を成就するところの必須最尊第一の法門である。もし智慧門によつて法身に帰依するところの自利成就せずば、我心によつて自身に貪着して、自損損他より外なるべく、したがつて、次に出て来る慈悲門、方便門も亦無いであろう。さればこそ、方便智(智慧門、慈悲門、方便門)の動きに対して、その根底に、般若の智慧の絶対静を説かれたのである。般若の智慧が、方便智へと転じて、般若の慧そのままの智慧門が説かれる所以であろう。智慧門によつてまず自樂に執着せんとする我が遠離せられずして、どうして、利他大悲の方便を成就することが出来よう。智慧門にして成就せられるならば、自然に、第二の慈悲門を成ずるであろう。

三、慈悲門

一。論註の文に云く

「二者依慈悲門、拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。拔苦曰慈、与樂曰悲。依慈故拔一切衆生苦。依悲故遠離無安衆生心」

菩薩が慈悲門を成ずるのは、一切衆生の苦を抜かんと欲するが為である。しかるに、もし一切衆生の苦を抜かんとすれば、無安衆生心を遠離しなければならぬ。

無安衆生心とは、我心貪着自身が外、即ち他に向かつては我心貪着自身と、同一の我が二つの相と、外にあつては無安衆生心、内にあつては我心貪着自身と、同一の我が二つの相となるのである。真実の智慧に於いて、慈悲は必然であるが故に、智慧門は次に慈悲門と共にあるのである。この慈悲門に隨順せんとするところの能依能順の心相を、遠離無安衆生心というのである。

一。拔苦与樂。「拔苦を慈と曰い、与樂を悲と曰う。慈に依るが故に、一切衆生の苦を抜き、悲に依るが故に、無安衆生心を遠離す。」

この拔苦与樂ということについて、南本涅槃經十四梵行品には、

「為諸衆生 除無利養 是名大慈……………拔苦
欲為衆生 無量利樂 是名大悲」……………与樂

この涅槃經の説は、論註と同じく、拔苦を大慈と云い、与樂を大悲としてある。しかるに、拔苦を大悲となし、与樂を大慈となす説も亦用いられている。諸経論中、心地觀經、智度論二十七、十地論二、俱舍論二十九、終南の般若讚等、皆拔苦を大悲、与樂を大慈とせられている。かくの如く相反するかに見ゆる二説がもちいられるのは、

二字互いに相通ずるが故である。今は但、本論の文義に順ずる便宜に依られたものである。

一。第二慈悲門は、第一門の、不求自樂、遠離我心等の智慧門に孕まれているし、無安衆生心を遠離して、衆生の上に拔苦与樂しようとする慈悲門には、第一の自身住持の樂を求めざる智慧門が孕まれている。即ち慈悲(利他)は、帰依(自利)に於いて必然であるし、帰依は、利他の慈悲によつて如実となるのである。しかして、慈悲門に於いて、抜一切衆生苦ということと、遠離無安衆生心ということと、二つのことを成就せんとするかに見えるが、この拔苦と遠離無安衆生心とは、一体の慈悲の両面である。即ち、対他的に云えば、拔苦であるが、対自的に表現すれば、遠離無安衆生心である。されば鸞師はこれを釈して、拔苦曰慈、与樂曰悲と云い、慈によるが故に抜一切衆生苦と云い、悲によるが故に遠離無安衆生心と云われる。されば慈とは衆生の苦を抜かんとする心であり、悲とは衆生に樂を与えんとする心であるが故に、無安衆生心を遠離するのである。しかるに、遠離無安衆生心は、そのまま遠離我心貪著自身の外への現れであるが故に、ここにも慈悲門は智慧門に孕まれていることが示されている。依智故不求自樂ものでなければ他の衆生に対する、離苦与樂の慈悲が生ずる所以はあり得ない。智慧は、真理に向かう正しい態度であると共に、正しき生活実践の態度であつた。正しき生活実践の態度とは、衆生の度すべきを知つて、自受用樂の地に安住せんと欲する所の退墮より己を守ることであつた。これ即ち慈悲によつて衆生を救わんが為ではないか。

四. 方便門

一、論の註に云く

「三者依方便門憐愍一切衆生心。遠離供養恭敬自身心故。正直曰方外己曰便。依正直故生憐愍一切衆生心。依外己故遠離供養恭敬自身心。」

菩薩が方便門を成就せんとするのは、業苦の一切衆生を憐愍せんとするが故である。一切衆生を大悲によつて憐愍せんとすれば、自身を供養し、自身を恭敬せんとする心を遠離しなければならぬ。

しかるに我等は前に、智慧門に依るが故に自樂を求めず、慈悲門に依るが故に一切衆生の苦を抜かんとすることを聞いた。この第一門及び第二門なくしては、第三方便門はあり得ない。何となれば智慧によつて我心を遠離し、慈悲によつて無安衆生心を遠離して拔苦の意志を成就せずば、何によつて、衆生を方便し憐愍することが出来よう。又、悲智二門も亦、限りなく衆生の上に利他成就するところの方便心とならないならば、悲智二門も如実のものではあり得ない。されば、悲智二門双運して、益物自在なるを方便門と云われるのである。

一。方便の二文字について、鸞師は、「正直曰方 外己曰便」と釈された。方は正直ということであり、便は己を外にして、他を内にすることである。

方とは方正の義であつて、菩薩の智慧を示されたものである。智慧は真如法性を照らす光である。しかして真如の本性は自他同体である。菩薩の智慧は、真如の同体を

知るが故に、自他の上に隔執を持たない。この自他に隔執を認めない心即ち正直の心である。この智慧、即ち正直の心が、「一切衆生を憐愍するの心を生ず」るのである。しかるに凡夫は、この真如の本性に背いて、自他の差別を隔執するが故に、又懇親中を見るのである。この懇親と隔執とを以て人に対するもの、即ち凡夫の邪見である。この邪見より、衆生を憐愍する心を生ずることは不可能である。菩薩は自他同体を了したまうが故に、懇親を見ず、隔執を見ず。故に正直というのである。この智慧よく一切衆生を憐愍するの心を生ずる、智よく悲を生ずるのである。この智慧に即する無縁の大慈悲を「方」というのである。

次に「便」とは慈悲を示す言である。便とは便宜で、其機宜に応じて、自己の為にせず、他の為にするをいうのである。あたかも、母が嬰兒を内に温かくして、己を外に寒さを忍ぶが如くである。又、便とは、「傍」の意である。言うところは、正殿に非ざるを便殿と云い、正座に非ざるを便座というが如くである。慈悲は必ず他を正とし、己を便とする。この慈悲あるが故に、智を資けて如実たらしめるのである。

一。論主は「方便門に依つて、一切衆生を憐愍するの心なり。自身を供養し恭敬する心を遠離するが故に」と説かれたるに對して、曇鸞は、「正直に依るが故に、一切衆生を憐愍するの心を生ず。己を外にするに依るが故に、自身を供養し恭敬する心を遠離せり」と説かれた。

「方」即ち「正直」に依るが故に一切衆生を憐愍するの心を生ずとは、前に述べたるが如く、智より悲を生ずることを示されたのである。正直とは、自他の間に隔執と懇親とを見ない菩薩の智慧であつた。この自他平等の智慧のみ、一切衆生の真相を知るのであり、業苦の衆生の真相を知るが故に、憐愍の心を生ずるのである。であるが故にこの正直の心の中には、既に、慈悲門に於いて説かれたる遠離無安衆生心の義を含むことを知るのである。智慧の正直に依らずして、如何して内、我心を遠離し、外、衆生に不安を与うる心を遠離することが出来よう。一切衆生を憐愍する無縁の大慈悲は、かくして正直の心より生ずるのである。

一。次に、外己の心が、「自身を供養し恭敬する心を遠離する」のである。これは、慈悲よく智慧を資くる義である。即ち外己の慈悲に依つて自身に着する心を遠離するのである。

自身の利養を求むる心をここでは「供養」と云われ、自らを愛重して名聞を求むる心を「恭敬」と云われるのである。本来は恭敬は、自らを卑謙し他の徳を推戴くを恭敬と云われるのであるが、ここには、その反対で、他を卑しめ自らを高くするを恭敬と云われたのである。「自身を供養し恭敬する心」、凡夫の己を内にし他を外にするところの慈悲なき相に外ならない。しかるに我等は既に智慧門に於いて、智慧に依るが故に「自樂を求めず」と聞いた。自身を供養し恭敬するとは畢竟、自樂を求めることができない。この自樂を求める心を遠離することが出来るのは、外己の慈悲によることが示されるのである。依つて慈悲のみがよく智慧を資けて如実たらしめると云われるのである。

以上によつて方便門こそは、慈悲、智慧の二徳に對する障を双つながら遮する道なることが知られる。誠に方便心とは、無我の大慈悲の現行の相である。衆生の苦惱を見てこれに同感せず、憐愍せざる心は、いわゆる利己心であつて正直の心ではなく、又、己を外にする能わざる自我愛は、己の爲の供養と恭敬とを求めて我欲の相を取る。この利己心と自我愛とは、根本に於いて二つのものではない。苦惱の衆生に同感憐愍しないが故に、供養恭敬自身心を遠離しないのであり、自供養心を遠離することが出来ないが故に、大悲同感しないのである。智慧に依つて慈悲を、慈悲に依つて智慧を相資相成すること知るべきである。

一。「是名遠離三種菩提門相違法」

以上によつて、智慧門、慈悲門、方便門の三門に依つて、菩提に相違する法を遠離することが知られた。

誠に、智慧、慈悲、方便の三門こそは、浄土の広略止観相入する還相の菩薩の念願の内容であることがわかつた。しかるに、還相の菩薩の大悲願心は、そのまま本仏弥陀の大悲の願心なるが故に、この障菩提門の文字はこれを亦、大悲願心を示せるものとして頂くことが出来る。即ち

「依方便門憐愍一切衆生心」（方便門に依て一切衆生を憐憫したもうの心なり）

等の祖点は、全てこれを利他の大悲として拝せられたものであり又、最初の文に

「菩薩如是善知回向成就 即能遠離三種菩提門相違法」（菩薩是の如く善く回向成就したまえるを知らば即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離するなり）との訓点を施さ24
れた所以も知られることである。

さればこの三心は、畢竟穢国に還相して願生浄土に生きる菩薩の一心の内容に外ならない。如来の願心に生きる還相の菩薩のみ、一、貪著自身 二、無衆生心 三、供養恭敬自身心 の菩提の障碍する心を遠離するのである。我等はこの還相の菩薩の廣大なる願心を聞いて静かに内觀の世界に帰入せしめられることではある。

第三講 順菩提門

一、順菩提門

一、標章「順菩提門者」

上に既に、次第の如く、智慧門、慈悲門、方便門によつて、遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養自身心と、菩提に相違する三障を離るることを説かれた。しかるに離るるところには、即ち得るものがなくてはならない。言いかえれば得る処なくしては、離るることは出来得ない。今その得る所を示して、順菩提門と云われるのである。されば、離順異なりといえども共に菩提に趣く一心の両面にすぎない。

幾度もくり返すが如く、自利によつて利他を成じ、利他によつて自利を成ずるのである。即ち般若の智慧によつて自利するが故に、利他の巧方便を起し、この利他の巧

方便が能く菩提を成就するに至るのである。今、隨順菩提の利他を巧方便と名づけられるのである。

一、論に云く「菩薩 遠離如是三種菩提門相違法 得三種順菩提門法滿足故」

この文に於いて、離三種とは、既に説かれたる菩提と相違する法の対治を「如是」等と牒し、得三種とは、次に菩提に隨順する法を明さんとすること示されたのである。猶、まず所明を標して、これより得菩提の因たる、能隨順の世界を説かれるのである。猶、

「得三種順菩提門法滿足故」

の文を、「得るが故に」と訓読すれば、還相の行者としての菩薩の所得であり、「得たまえるが故に」と祖点の如くすれば、法蔵菩薩の大悲の願心を示せるものとなること、前の通りである。

二、無染清淨心

一、論註に云く「何等三種。一者無染清淨心、以不為自身求諸樂故。菩提は無染清淨心。若為身求樂即違菩提。是故無染清淨心是順菩提門。」

順菩提門の第一は、無染清淨心である。これは上の智慧門に合するのである。無染とは、染とは染着心のこと、染着心とは、我が身の為に諸樂を求めざる心である。この心よく菩提を障碍するのである。智慧門によつて、己が為に諸樂を求めざる心を成ず、これを名づけて無染心というのである。この無染心は、よく菩提に隨順する故に順菩提門と名づけられるのである。

清淨心の清淨とは、所求に約して名づけられたものである。畢竟清淨は、是れ菩提の体相である。故に已下、無染清淨心、安清淨心、樂清淨心と、三心は皆この菩提の体相に隨順するが故に、清淨を以て通称されるのである。この清淨なる菩提に隨順する心なるが故に亦、三心は皆清淨心である。

一。「菩提は無染清淨心」

智慧によつて、隨順する所を明かにするのである。菩提は無染清淨の心である。仏果の徳であつて、下の文には、「無所得法名為菩提」とあり、したがつて、無我の心、無染着の心によつてのみ得られるのが菩提である。もし、我の心、染着の心があつて、我が身の為に樂を求めざるならば、無染清淨の心たる菩提に相違するのである。されば、

「若為身求樂即違菩提。是故無染清淨心是順菩提門」

と説かれるのである。

我等はこの論の意を聞きつつ深い内觀に引き入れられる。衆生は貪欲等の汚染によつて、染着心のみを持てるものである。三毒は、共に、ものに貪愛を感じ、取捨の想を起さしめて、それ自身菩提に相違する心である。されば三毒を三垢と言われるのである。三毒は清淨ならぬ三垢である。されば、如来は衆生貪瞋二河の間に、信心、即ち清淨願往生心を回向成就して、本願名号に隨順せしめたまうのである。されば本願力回向の大信心のみが、「身の為に樂を求め」ざる心なるが故に、無上菩提心と云わ

れるのであろう。信心は無上菩提心である。真実の菩提の法に随順する心である。されば、この心によつて、無染清浄心を解するならば、無染清浄心とは、願作仏心のことである。願作仏心は、自利の心である。

願作仏心の自利は、唯如来の本願力によつて成就するのである。還相菩薩といえども、如来の本願力によつてのみ、この浄土の意、無染清浄心を成就して自利成就するのである。前に説かれたが如く、還相の菩薩といえども、具体的には、法身への帰依によつて、智慧門を成就することを想起すべきである。法身への帰依に依つて、智慧門の清浄を成就するのである。故にこの心は即ち願作仏心である。

三、安清浄心

一、次に論註に云く

「二者安清浄心、以拔一切衆生苦故。菩提是安穩 一切衆生清浄処。」

安は安穩であつて、衆生をして安穩ならしむるをいうのである。無染清浄心によつて自身の樂を求めざる心を更に一步進むれば、一切衆生の苦悩を抜いて安穩ならしめんとする安清浄心となるのである。されば安清浄心は、第二の慈悲門と合するのである。

天親論主が、「二には安清浄心、一切衆生の苦を抜くを以ての故に」と説かれたるに對して、鸞師はこれを註して、「菩提は是れ一切衆生を安穩にする清浄の処なり」と説かれる。

一。菩提是安穩。鸞師の言は、その所隨順を明かされるのである。菩提は、分段、變易の二種生死を離れたる境界であるが故に、衆生を安穩にする処と云われるのである。生死は遂に安穩ではない。清浄処とは、菩提は其の体三界の業煩惱を離れたる世界なるが故であり、それ故に、一切衆生を安穩ならしむるが故に、安清浄と云われるのである。煩惱罪濁は遂に安穩ではない。安清浄なる菩提を求める菩薩の心を安清浄心と名づけられるのである。されば真実の菩提心は必ず安清浄心である。

菩提心は安清浄心である。しかるに、「菩提は……清浄処なり」と云われるのは、菩提心の動く処、衆生は安穩にされるからである。されば、「世の中安穩なれ」との願は「仏法ひろまれ」との願となる。仏道は、自利利他一如の無上菩提心を成就することこそ、唯一の目的である。菩提心によつて生死罪濁を超えて、やがて大涅槃を証悟する処にのみ、この願は完成されるのである。菩提心は、如来本願力の成就したまうものなるが故に、清浄である。無染清浄であるが故に安穩である。安穩でなければ清浄ではない。かるが故に、菩薩は、衆生を安穩にせんが為には、それ已前に、智慧門によつて法身に帰依して、無染清浄心を成就するのである。清浄なる智慧によつてのみ、安清浄心は生まれるのである。安清浄心のみが、「一切衆生の苦を抜く」ことが出来るのである。

一。次に、能違を挙げて反顯して云く、

「不作心 抜一切衆生 離生死苦 即便違菩提」

この文は屢々その意を間違えられ易い文であるが、作心は「作意しつとめて」自ら進んで、一切衆生を生死界から抜いて生死の苦を離れざる為に、作心しないならば、即便ち、菩提に相違するという意である。であるから「作心」の文字は菩薩の抜苦の為の意志である。これをうかつに見れば不作心と、作心そのものを否定されたようであつて、菩薩の任運無作の利他行ととれるが「不作心……違菩提」として見ればよくわかるように、抜苦の為に作心しつとめなければ菩提に相違することを示されたものである。故に作心は抜苦の意志である。

かくて菩薩の所期も安清浄なる菩提であり、この抜苦の心も亦、衆生を安穩ならしめる安清浄心であるが故に、相順の義を成するのである。念仏の行者はもちろん往生相位にあるものではあるが、信心の智慧による限り、その境に安穩を示顯するのは、如来回向の清浄なる願往生心、即ち無上菩提心なるが故である。

四、楽清浄心

一、第三に、楽清浄心について云く、

「三者楽清浄心。以令一切衆生得大菩提故。以撰取衆生生彼国土故。菩提是畢竟常楽処。若不令一切衆生得畢竟常楽則違菩提。」

楽清浄心は、智慧門、慈悲門、方便門の三門の中の、第三方便門に合する。まず、論の文を見れば、

以令一切衆生得大菩提故
以撰取衆生生彼国土故

と、「以故」が二度あることに注意しなければならない。

初めは、楽清浄心を通途に約されての説であり、後に別途に約されての文である。即ち、菩提心は、一切衆生をして畢竟常楽たる大菩提心を得しむる所の、楽清浄心を内具する。これ安清浄心を更に一步進めたものである。但に衆生の苦を抜いて安穩ならしむるのみならず、更に衆生をして大楽の境に置かんとするのである。然れば、かかる願は具体的には如何にして成就するのであるか。これ即ち別途の説「衆生を撰して彼の国土に生ぜしむる」ことによりて成就するのである。

飢餓に迫る衆生をして其の精力を得しむるといふのが通途の願であれば、これに具体的には、飯食を与えるといふのが別途の方便であるように。餓えたる者に金を与えても意味はないが如く、大菩提を得しむるといふ通途の願が満足されなければ、彼の浄土に生ずるといふことは意味を持たないし、大菩提を得るといふ願は、事実に於いては、往生浄土ということによらなければ成就しないのである。ここに通別二途を示された所以である。世のもし、衆生を撰取して浄土に往生するといふ別途の願なくして、一切衆生をして大菩提を得しめんとする願を満足せんとするならば、それはいわゆる聖道の慈悲であるし、衆生をして撰取して浄土に往生せしむるといふことが、大菩提を得しむるといふ通途の願を内具しないならば、菩薩の願心はあり得ないである。

ここに於いて、菩薩は衆生をして大菩提を得しめんと欲す。それ故に要す衆生を撰して浄土に生ずるのである。されば仏土に生ずることは菩提を得るの方便である。されば、還相の菩薩といえども、具体的には自ら浄土に願生し、その願生浄土を通して一切衆生を撰取して浄土に往生し、その利他の願を満足せんとするのである。

一。論註に云く

「菩提是畢竟常樂処。若不令一切衆生得畢竟常樂則違菩提。」

菩提心が得証するものは大涅槃の証果である。涅槃は、いわゆる、常樂我淨の四徳を円満する仏果そのものである。されば菩薩はこの大涅槃の境に隨順しなければならぬ。故にここにその所隨順を挙げられるのである。「菩提は是れ畢竟常樂の処なり。」菩薩所期の菩提は、畢竟常樂の処である。「処」とはその体即ち畢竟常樂というのではなくて、菩提に住すればやがて畢竟常樂を証すと云われるのである。畢竟とは「最後の」というほどの意であり、常樂とは常住快樂、或は、常住大樂である。涅槃の四徳中の二徳を挙げられて、「樂清淨心」の「樂」が涅槃の大樂を意味することを顯したのである。涅槃の常樂我淨の樂を置いて外に、畢竟常樂はない。三界は皆これ虚仮顛倒であつて、樂といえども苦である。しかるにかかる永遠の大樂に到る心は、菩提心より外にはあり得ない。この故に「菩提は畢竟常樂の処」と云われるのである。その意は「菩提は畢竟常樂を得させる処」という義である。

菩薩は、自ら菩提心によつて、大涅槃の法に隨順して、この大樂を得証すると共に、一切衆生をして、この畢竟常樂の処たる菩提心を成就せしめて、やがて衆生をして常樂の境にあらしめんとするのである。かるが故に、釈に「もし一切衆生をして畢竟常樂を得しめずば、則ち菩提に違しなん」と云われるのである。眞実の菩提心にあらずば畢竟常樂を得しむることは出来ないし、畢竟常樂を得しめないならば、菩提心とは言われない。

一。「もし一切衆生をして畢竟常樂を得しめずば、則ち菩提に違しなん」

眞実の菩提心は、自利成就して畢竟常樂を得ると共に、必ず利他成就して、一切衆生をして、畢竟常樂を得しめる。もし一切衆生をして畢竟常樂を得しめないならば、それは菩提心ではあり得ないのであつた。

一。次に問題を徴起して云く、

「此畢竟常樂 依何而得。」

かかる自利利他一如の畢竟常樂は、具体的には、如何にして得るのであるか。答えて云く

「依大乘門。大乘門者謂安樂国土是也。是故、又言以撰取衆生 生彼国土故」

彼の弥陀仏の安樂浄土は大乘門である。その大乘門たる安樂仏国に依つて畢竟常樂を得るのである。

彼の仏国土は大乘門である。既に国土莊嚴十七種中に、大義門功德成就を説いて、「大乘善根界等無譏嫌名。女人及根欠二乗種不生」

と讃えられてあつた。大乘門とは大義門のことである。浄土の土徳は、浄土それ自体から、女人と根欠不具と、二乗を発生しない。かかる雑悪雑善の差別を発生しないのみならず、女人も根欠も二乗も、浄土に入れば一切を転じて一乗一味たらしめられるのである。これ即ち浄土が大乘門と云われる所以である。

又仏莊嚴功德八種の中には、特に浄土の大衆の上に、仏の功德莊嚴を觀察して、「天人不動衆清淨智海生」

と偈讚し、これを鸞師は積して、積尊等の世界に於いては、大衆の根性欲不同の為、受法不同の為に、仏智慧に於いてもしは退墮して二乗に入り、もしは生死に没在することを示して後「所以興願、願我成仏所有天人皆從如来智慧清淨海生」と云い、海を積して

「海者言仏一切種智深広無涯。不宿二乗雜善中下屍尸喻之如海」と積して、彼の仏国には、唯大乘の菩薩のみにして、二乗雜善の屍尸なきことを示された。更に天人不動の不動を積しては、

「不動者言彼天人成就大乘根不可傾動也。」

と結ばれた。この積は全く大義門功德の意によられたものである。国土の徳というのも、仏徳というも、もとより依正不二なるが故に、彼の仏国の大衆は、土徳即仏徳たる、深広無涯底の仏智海によつて、大乘善根を成就して涅槃さながらの徳に生かされるものである。かるが故に、浄土は平等一味であり、大乘一味である。仏徳によつて大衆の功德を成就し、大衆の功德によつて仏国土の徳を顕現するのである。これを以て大義門となし、大義門功德というのである。

されば経には、

「彼の仏国土は、清淨安穩にして微妙快樂なり。無為泥オンの道に次し。其の諸の声聞菩薩天人、智慧高明にして神通洞達せり。咸同じく一類にして形異状無し。但余方に因順するが故に天人之名あり。顔貌端正にして超世希有なり。容色微妙にして天に非ず。皆自然虚無之身無極之体を受けたり。」

と説かれる。大乘善根界なるが故に、余方に因順して五乗あるが如く説くも、非人非天、非声聞、非縁覚、非菩薩咸悉く、涅槃の徳（無為泥オン）と相即不離一体の（次し）証果を成就して、數量形色を絶したる「虚無之身、無極之体」を成就しているのである。それなるが故に、「清淨安穩微妙快樂」と、その畢竟常樂の境たるを示されるのである。

この故に、先に、無上方便を説くに当たつては、「彼の仏国は即ち是れ畢竟成仏の道路無上の方便なり。」と示されたのである。

一。誠にいわゆる聖道門と浄土門との相違は、ここにあるのである。いわゆる聖道門に於いては、自ら智慧に依つて此土開覚せんとし、浄土門に於いては、かくの如き大乘門たる安樂仏国に願生し、これに依つて、仏本願力によつて開覚して、畢竟常樂を得んとするのである。聖浄二門の相違は、全くこれにあつて他にあることなし。

これによつて「是故又言以撰取衆生彼国土故」と結ばれるのである。「又」の字、注意すべきである。即ち、天親論主は樂清淨心を説くに当たつて、

「一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に。衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に。」と二度「故に」と言ることを、今「又」云われたのである。還相の菩薩は誠に一切衆生をして、畢竟常樂の大菩提を得しめんとする。しかるにこの願は、具体的には、衆生を撰取して彼の仏国土に往生せしめることによつて成就することに於いて、成仏道は願生道に転化し、願生道は成仏道と一致して、眞実の仏道を成ずるのである。

智慧門、慈悲門、方便門によつて、無染清浄心、安清浄心、樂清浄心を成就することを説くは、これ全く成仏道の意である。撰取衆生、生彼国土を説くは、願生道である。願生道にして成仏道の意味を成就しないならば、それは如実の願生道ではあり得ないし、成仏道も願生道とならないならば、眞実には成就しないであろう。眞実に浄土に往生する者のみ、成仏道の因果は成就する。何が故ならば、仏本願力に依るが故である。かるが故に、願生道とは、仏の本願力に信順することである。

一。ここに於いて、

「是名三種隨願菩提門法滿足応知」

と結示されるのである。

噫。広大なる哉、願生道。久遠劫来迷倒して六道輪廻せる有情は、仏の招喚により、世尊の教えによつて、往生即成仏する。のみならず、生死に還来穢国して、衆生を度せんとする菩薩も亦、実際には、自ら彼国に願生し、それを通して衆生を撰取して浄土に生ぜしめるのであつた。我等は、暗にあつて、遙かに無量光明土に願生の一道をたどりつつ、深く還相の菩薩の意を聞いて、無限の内観の世界につれ込まれるものである。

私は柔軟心の題下に頂いて来たが「柔軟心」とは実に、仏智によつて成就する浄土の意であり、又願生の意であつた。誠に菩提に隨順して衆生と共に彼国に願生せんとする菩提心は、如来浄土の徳によつて成就する柔軟心であつた。一まずこの講を了ることにする。(完)